

愛を告げる日

その真実を求めて

田中澄江

愛を告げる日
✿
田中澄江

大和書房

著者紹介 たなか すみえ

1908年、東京に生れる。東京女高師文科卒業。聖心女子学院教師を経て文筆生活に入る。以来女としての生き方を説き起して、圧倒的な支持を得ている。

劇作家としても戯曲、テレビ、ラジオなど幅広い分野に活躍。テレビドラマ「うず潮」「虹」は茶の間に大きな反響を呼んだ。

現在、日本ペンクラブ、日本文芸家協会、日本演劇協会会員。著書に『山によせる心』『私の旅 私の花』『忘れてならないもの』(共に大和書房)『愛しかた愛されかた』(青春出版社)『犬と猫のはなし』(講談社)他、多数。

愛を告げる日 その真実を求めて

1973年2月15日 初版発行

著者 田中澄江

発行者 大和岩雄

発行所 大和書房

東京都文京区関口1-33 郵便番号112
振替東京 64227 電話(203)4511
印刷・東洋印刷 製本・東京美術紙工

落丁本、乱丁本はお取替えます〈検印略〉©1973

0012-000630-4406

目次

第一章 愛を見つめ始めたら―愛の真実と確立のために

愛―この不可欠なもの 11

もし愛がなかったとしたら 子供を育くむという女の性 親の愛の哀しさ 愛されることのありがたさ

愛することの辛さと苦しさ 17

たとえ報いられなくても つきまとう試練 たとえ我が子が犯罪者であつても…

愛の本質とは何か 21

愛は誓いうるものか まことの愛に生きるとき

こころを伝えたい―愛のことは 24

恋のはじまりの苦しさに 家族を思う心 ほんとうの愛 ひとのやさしさ 言葉にならない深い心 美しいひと 花はなぜ咲くか 自然を愛しつらぬい

て 高山の花 虫のあわれにきく 好きな言葉

第二章 嫁いで行く娘のために―妻としての賢明な生き方

愛の出発―嫁ぐ娘へのおもい 53

目に入れても痛くない存在 女がなすべきこと 決
して手ばなしたくない

何に心を配るべきか―姑との円満な関係 62

豊かさが変えた妻の姿 同居―都会と地方で異なる
悩み 嫁姑の地位を左右するもの 夫という存在
姑に望みたい〃いさぎよさ〃 二人の女としての歩み
より

いたわりあうことの大切さ―夫と妻の在り方について 73

媚びるだけの女でよいのか よろめきドラマに惹かれ
る妻の心理 持きたい〃節度〃とは

何を自覚すべきか―子を幸せにする願い 80

親の愛を知らない子供達 忘れてはならない存在
たとえ教育ママと呼ばれても… 最上の親となるため

に 目につくしつけの欠如 自己を律する大切さ
忘れられた言葉づかいへの神経

豊かな人生を願うなら—どんなつきあいをすべきか 90

おろそかにしてはならない心のふれあい 夫の友人と
のつきあい方

“共かせぎ”のすすめ—わたくしの体験から 93

妻が養ってもらうということ やむをえず共かせぎを
始めて 心にとめておきたいこと

二人で築き上げるもの—三組の若夫婦の場合 98

娘の母としておもうこと 不安のない日々 女同士

の微妙な感情 “男の面目”ということ 柔和な女と
しての魅力

実家と婚家との間での身の処し方—若い妻たちの悩みにこたえる

婚家の悪口がもとで 家風の違いに悩む妻 金銭が

からむ微妙な問題 夫と実家との気まずい関係 心

のこもった贈り物とは 夫の父のわがまま 夫に認

めてほしい実母との同居 両親の世話を誤解されるく

やささ

第三章 女の魅力・女の内面―愛されるための条件

みずみずしい女の魅力―化粧について 135

若いという決定的な要因 人の心をとらえるもの

ひろがる心の眼―女と男の言葉について 138

男と女の区別 仲間で使う言葉のころよさ //

言葉の魅力

女を失望させる男の姿 144

たった一人ではできないこと 素直さという何にもま

す美点

やわらかな心を―弱さを生きるとき 148

男はいばりすぎる!! //人間らしさをとりもどしたら

第四章 見失なつてはいけないこと―女として生きる知恵

おしはかる心の尊さ―脈々と波うつ女心 155

叱られることのころよさ 本心に愛しているからこ

そゝ 失なつたものへの訣別^{けつべつ}

受け継がれる女の生き方―姑に学びたいもの 160

家族のために生きる女 貫かれたやさしさ

やさしさへの憧れ―母を恋う心 164

陽気で無邪気だった母 泣くことでいやされる恋しさ

女らしさとは何か―針供養に寄せて 168

女としての資格とは

生まれ出る芽―育くみ守る心 170

新たな期待にみちた誕生 築かれる年月の積み重ね

女に生まれた生きがい―母として女として 174

いま何か忘れていないか 〃苦しみさえ幸せだった〃と

言えるとき

女が幸福であるということ―〃繰り返し〃の中の知恵 177

女が生きてきた道 目立たぬ平凡なことであっても…

やさしさと豊かさ―気概に満ちた生き方 180

新しい女の生き方を求めて 青鞥社の女性達 溢れ

出る才能―伊藤野枝という女 奉仕するよろこびに生

きる―看護婦という職業

第五章 生きるということ―「勇気」こそ人間のささえとなる

信じる人間の救い 187

人生をささえる道標とは

生きてある限り―希望へのはなむけ 189

昨日よりは今日もつとしあわせでありたい： 人生を

みつめなおすということ //死//に思う//生//の尊さ

何をつらぬいて生きるか―愛と死のはさまから 193

涙なしに読めない手紙―死刑囚Sのこと 切っても切

れない母子の絆 なぜ追いつめられたのか： 無垢

で純粋な愛情 どうぞ母を責めないでください 平

安な内に秘めた死の覚悟 どうしても助からなかった

のか 死をのり超えるもの 大好きなおかあさん、

さようなら

甘えられるひと―父恋いへの想い 213

幼い魂に焼きついた思い出 素直な心を奪うもの

たとえ名もない存在であっても―//やさしさ//への指針 217

真心のこもった祖父の思い出 暖かくも厳しい女

盲^{めくら}いてもなお学ぼうとする心

かけがえなく大切なもの―他人を思いやる心 221

人間が人間らしくなるために 心を包むやさしさ

お金の役立て方を考えよう

第六章 若い人に贈る言葉―生きる指針をどうたてるか

辛さを秘めて歩むとき―人生に対処する姿勢 229

大地に根をはるたしかな生き方 日に新たに生きると

いうこと

愛することの憧憬に燃えたら―若いひとのつきあいかた 233

夢と現実の間にあって 好意と恋心の錯覚

心をいやすもの―人生の成長への道標 236

魅せられた憂愁 青春の心をとらえる歌

若いいのちの義務——人生に負けない考え方

239

はちぎれそうな新鮮な魅力 若い人という至上の特権

装幀 代田 葵

第一章

愛を見つめ始めたら

愛の真実と確立のために

新

緑のかがやくとき、女の美しさも映える。

緑はいのち溢れるいろ。

女の健康な素肌の粧いも

緑のゆたかさにおとらぬ。

心の愁いは風に散らして、

晴れ晴れと陽を仰ごう。

微笑みを青空にむかって。

そのとき女は緑より花より、

地上にもっとも美しいものになろう。

愛—この不可欠なもの

もし愛がなかったとしたら：

愛という言葉が氾濫はんらんしている。『広辞苑』で引いてみた。
愛—。

「なさけをかけること。かわいがること」という意味が第一。次に、

「男女が思いあうこと。恋愛」。そして、第三に、「何ものかにひきつけられる感じ。また、ある物事に没頭すること」などがあった。

『字源』を引いてみた。

「いづくしむ」「めぐむ」「かはゆがる、あはれむ」「めづる、このむ」「恋したふ」など。あつて、いずれにしても、愛の反対は憎むことであり、厭いとうことであり、嫌うことである。それらの感情をとげとげと冷たいものだというなら、愛はやわらかく、やさしく、あたたかい

氣持。そのそばにいたときは、こちらの胸にほつきりと灯がともって、明るくなるような氣持をいうのであらう。

子供の頃にこんな童話を聞いたことがある。一人の旅人がマントを着て、野の道を歩いていった。太陽と風が競争した。

「どちらがあのマントをとることができるかね」

風はびゅんびゅんと強く吹きつけ、旅人のマントはいよいよしつかりと身をまもるように、その手で固く握りしめられてしまった。では太陽は何をしたか。ただ光を少し強くしただけであつた。

あたたかくなつた旅人は、マントをぬいだ。この話は、人間の固い心を解かせる鍵は、強く冷たい風のようなものではなくて、やさしくあたたかい太陽の光のようなものであることを教える。太陽の光とは、愛の意味であらう。

たしかに人間の生活には、人間を鍛えるための強く冷たい風も必要である。しかし、風ばかりに吹きさらされていると、心の荒廃を招く。風を敵、相手を滅ぼすことを願うもの、憎しみに燃えるものとして、わたくし達は自分を甘やかさないためには、ときには敵のいることも望ましいと思う。

しかし、周囲すべてこれ、敵にとりかこまれた状態の中では、人間を信じることができな

くなつて、その心は疑いと警戒に満ち、孤独にさいなまれて、その苦痛に耐えがたい。気の弱いものは、絶えぬ危害の不安におびえて発狂しかねない。戦場の兵士たちの中には、そのようにして精神を破滅させていったものがたくさんあった。

人間が人間らしく生きるには、その肉体のために空気や水や太陽が必要のように、その心のいのちをみずみずしく保つために、愛のいたわり愛のやさしさもまた欠くことができない。もう十年も前になるけれども、和歌山の女子刑務所にいつて、女囚として服役している人達を集めたとき、社会から隔絶されて、それぞれの罪に服さなければならぬ不幸な人達が、このような場所に送られてくる原因をつくつたのは、愛の裏切りへの復讐、愛の枯渇した家庭への反抗、愛を求めての非常手段に訴へ出たものが多いときかされた。

盗み、放火、殺人などは、いずれもその底にゆがめられた愛への渴望があった。ことに女囚の場合に、もしも彼女達が人並みな愛を与えられ、また、自分の愛に相手もこたえてくれているのであったら、犯罪者という忌わしい境涯には落ちずにすんだものがずいぶんいるはずと聞かされて胸が痛んだ。

子供を育くむという女の性

女は男のように、仕事の世界で生きるよりも、多くは家庭という巢の中で、安らかに子供を育てることを望むものである。外で働

くよりは、家族のために細かい心づかいをして、おいしいものをつくり、家の中をきれいに片づけ、子供達の面倒をみる。そして余暇があれば、自分の趣味を生かす。戦後は外に出て働く女の人もふえたけれど、少なくとも子供達が小さいうちは、家にいて、子供のかたわらにいたいというのが、いつの時代にも変らぬ女の気持ではないだろうか。

女は自分のかわいがる相手を、かたわらにおいておかずにはいられない。女はむごいもの、冷たいもの、非情なものよりも、いたわりに満ち、あたたかく、情けのあるものにひかれる。その心の底に流れているのは、意識するとしないとにかかわらず、子供という新しいのちを育てる女本来のすがたである。

親の愛の哀しさ

いつくしみ、このみ、夢中になってそのものにひきつけられるのでなくては、子供は育てられない。子供を育てることがよるこびであり、生きがいではない、子供のようには面倒なものを手にかけてはいられない。ことに成長した子供達が、親にたいして、どれだけその愛にこたえてくれるかといえ、およそこれほど期待できぬものはない。世間には親にそむく子供達、親を見捨てる子供達があとを絶たず、大ぜいの子供がありながら、老年になってだれも一緒に住んでくれず、親は養老院へと既定方針のように言われて、川に身を投げたりする老人の自殺記事が、よく新聞の社会面の片隅に小さく出ている。残さ